

平成18年度の漁況

佐々木 正・曾田一志

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図1に1960年（昭和35年）以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示す。

2006年の漁獲量は約5万9千トンで、前年および平年（過去5ヶ年平均）の103%となった。魚種別に見ると、近年漁獲の主体となっているマアジが2年連続して減少した（平年比9割）ものの、サバ類、カタクチイワシが平年を約3割上回ったことなどから、漁獲量は、ほぼ前年、平年並みとなった。

2006年のCPUE（1ヶ統1航海当り漁獲量）は30.2トンとなり、前年の113%、平年の119%とやや増加した。

(2) 漁労体数の動向（図2）

中型まき網漁業の漁労体数は、1969年には78ヶ統あったものが、徐々に減少している。この原因としては、対象魚種の変化や漁労技術の発達、漁船の大型化などが考えられるが、1990年代以降は、マイワシ資源の減少に伴う経営の悪化が最大の要因であった。さらに、2000年以降は減船事業の導入もあり漁労体数が急減した。

2006年の漁労体数は前年より2ヶ統減少し、13ヶ統となった。

(3) 魚種別漁獲状況

図3～7に島根県の中型まき網による魚種別月別漁獲動向を示した。

① マアジ

2006年の総漁獲量は約2万5千トンで、前年の89%、平年の87%と低調に推移した。

これは例年まとまった漁獲のある春季において漁獲が低迷したため、特に浜田地区においては2、3月の漁獲量が平年の数%と激減し、記録的な不漁となった。この原因としては、春季の漁獲の主体である2005年級群（1歳魚）の

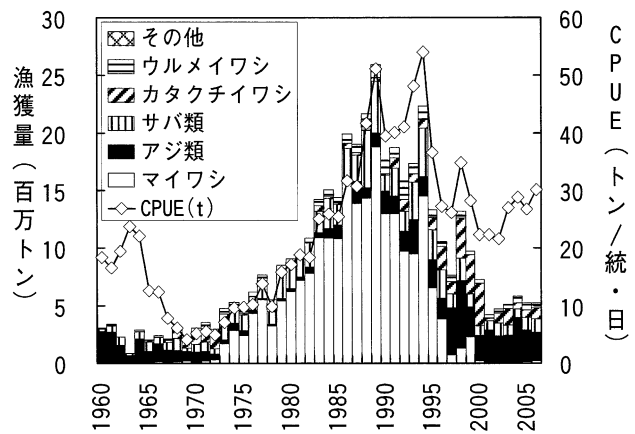


図1 島根県の中型まき網による魚種別漁獲量とCPUEの推移（2002年までは農林統計値、2003年以降は漁獲システム集計値）

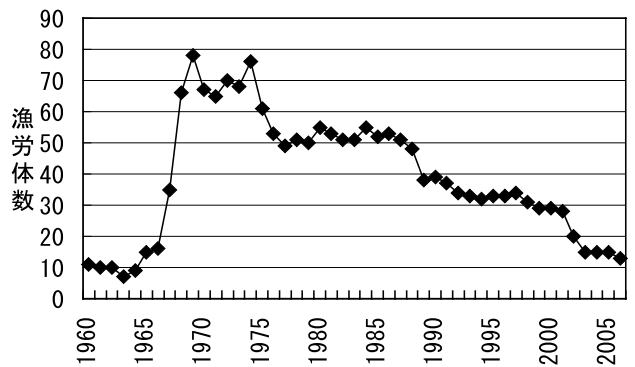


図2 島根県の中型まき網漁労体数の推移

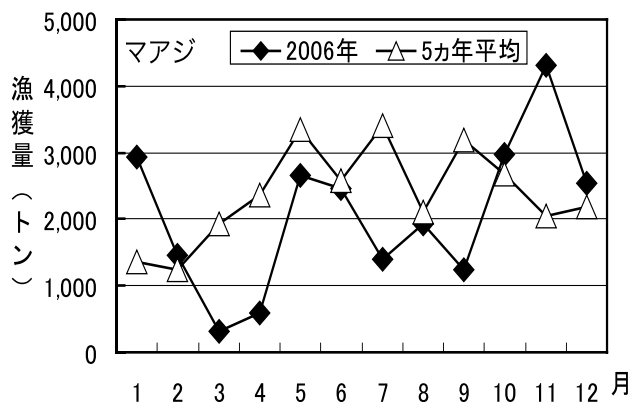


図3 中型まき網によるマアジの漁獲量

加入量が低かったこと、春季の水温が平年よりかなり低かったことなどが考えられた。

②サバ類

2006年の総漁獲量は11,962トンで、前年の115%、平年の133%となり、2年連続で前年、平年を上回った。漁獲の主体は豆サバ（0～1歳魚）で、9月の漁獲量は平年を下回ったものの、10月、11月で平年を大きく上回る漁獲があり好調に推移した。

③マイワシ

5、6月および9月に県東部で小羽を中心に平年の4～30倍となるまとまった漁獲があった。2006年の総漁獲量は1,735トンで、前年の1.3倍、平年の4倍となり、3年連続で増加となった。しかし、マイワシ資源は全国的に低水準状態にあり、資源の回復は当分見込めそうにない状況にある。

④カタクチイワシ

4、5月および8、9月に県東部で平年の4～6倍となる1～3千トンのまとまった漁獲があり、2006年の漁獲量は9,403トンで、前年の143%、平年の125%と好調であった。

⑤ウルメイワシ

2006年の漁獲量は4,146トンで、前年の66%、平年の92%となった。例年、県西部での漁獲は極僅かであるが、浜田地区では2月にまとまった漁獲があったため平年の8倍の漁獲量となった。県東部では毎月ほぼ連続して漁獲はあったものの、前年のような千トン単位のまとまった漁獲は見られなかった。

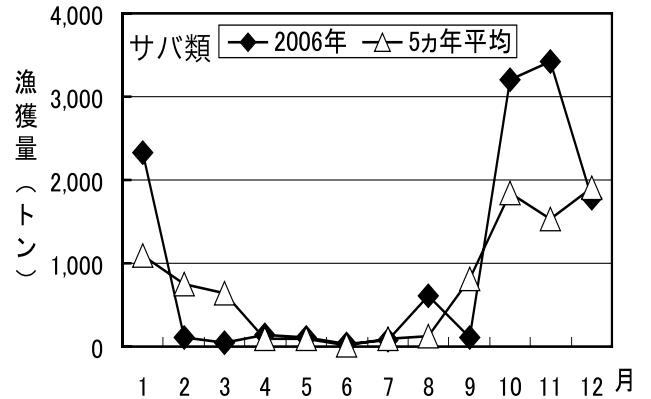


図4 中型まき網によるサバ類の漁獲量

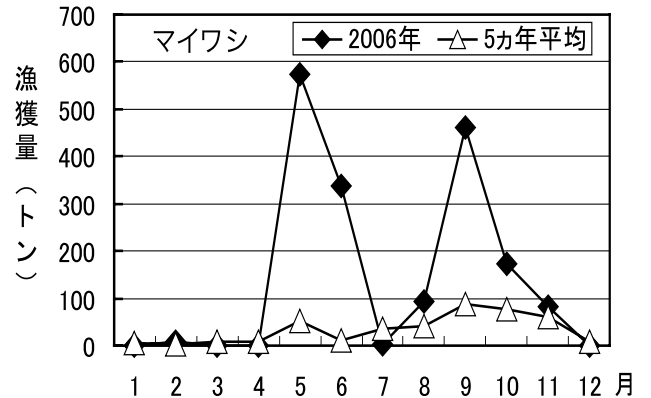


図5 中型まき網によるマイワシの漁獲量

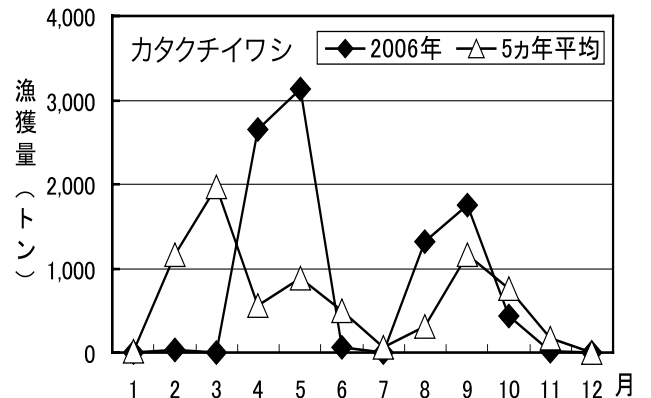


図6 中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量

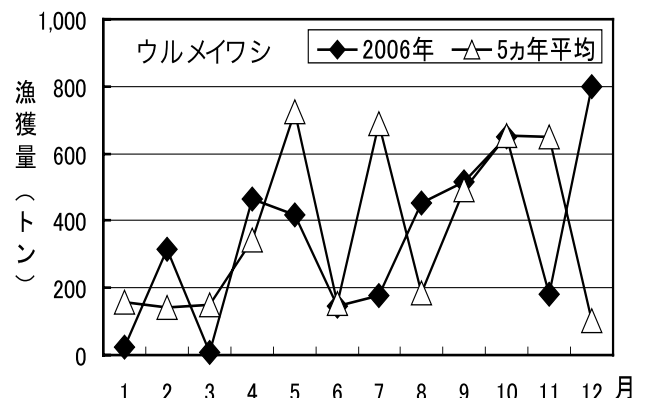


図7 中型まき網によるウルメイワシの漁獲量

2. いか釣り漁業

ここでは、いか釣り漁業（5t未満船）、小型いか釣り漁業（5t以上30t未満船）、中型いか釣り漁業（30t以上）によって浜田港に水揚げされたイカ類の漁獲動向をとりまとめた。

(1) スルメイカ

浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲動向および水揚げ金額の動向を図8と9に示す。漁獲量は前年は3年振りの増加となったものの、2006年は544トンで、前年の45%、平年（過去5年間）の42%と再び減少し、過去5年間で最低の値となった。水揚金額も2億3千万円で、前年の44%、平年の47%と大きく減少した。

図10に月別の漁獲動向を示す。浜田港において漁獲の主体となっている冬季発生群は1月以降、漁場が北九州沖を主体に形成されたため島根県沖合海域での漁獲量は少ない結果となった。

(2) ケンサキイカ

浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲動向および水揚げ金額の動向を図11と12に示す。

2006年のケンサキイカの漁獲量は、321トンで、前年の107%、平年の61%となり、2年連続で低調に推移した。前年と同様に漁獲量の減少に加えて、魚体が小型のものが多かったことから単価（781円/kg）も低く、水揚げ金額は2億5千万円で、前年の109%、平年の52%と低迷した。

図13に月別の漁獲動向を示す。2006年は漁期初めから漁況は低調に推移した。8月に入ると沿岸域を主体に平年並みの漁獲があったものの、近年漁獲の主体となっている9月は時化の影響により漁獲が伸び悩み、その後も平年を下回って推移した。

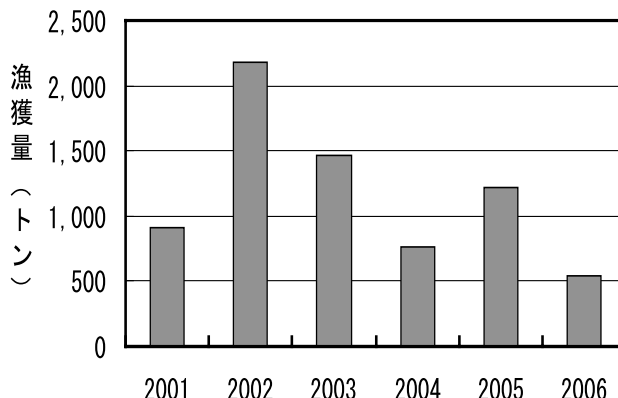


図8 浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲量の動向

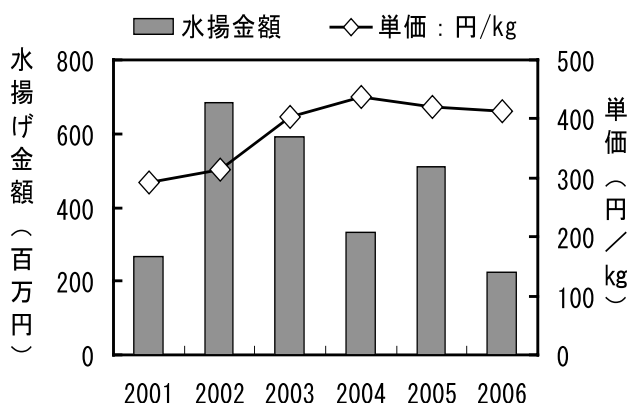


図9 浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲金額と単位の動向

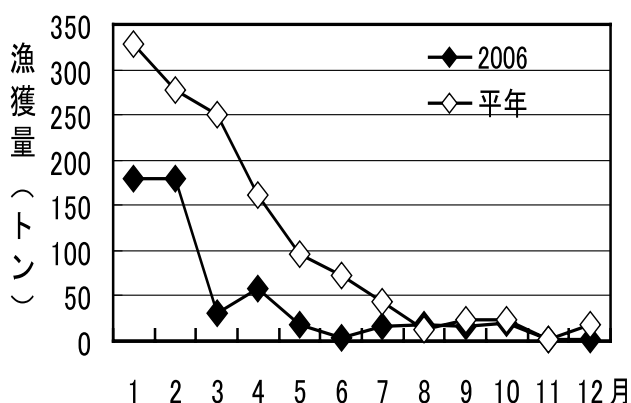


図10 浜田港に水揚げされたスルメイカの月別漁獲動向

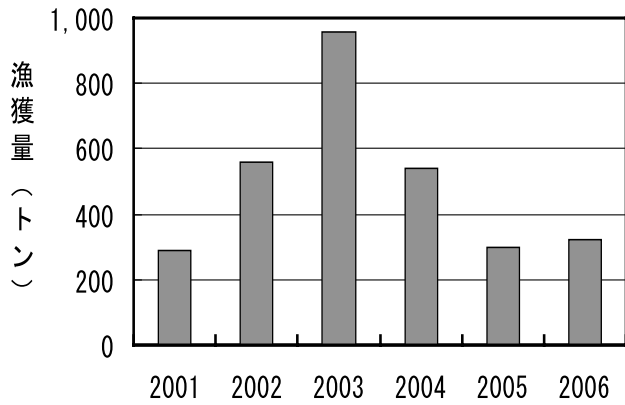


図11 浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲量動向

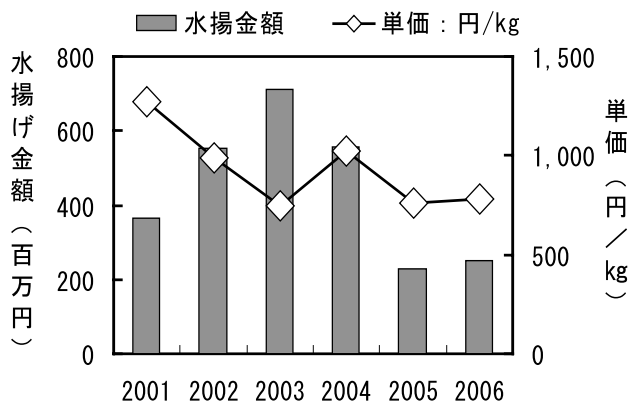


図12 浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲金額と単価の動向

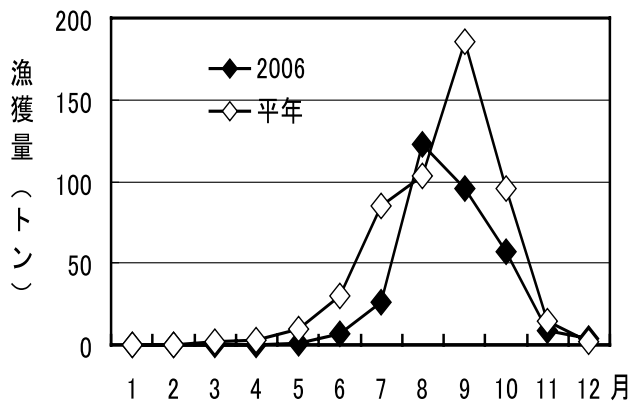


図13 浜田港に水揚げされたケンサキイカの月別漁獲動向

3. 沖合底びき網漁業

本漁業は東経128度以東の日本海南西海域を漁場としており、島根県では8ヶ統が操業している。本報告では、このうち浜田港を基地として操業を行っている5ヶ統を対象として解析を行った。操業期間は8月16日から翌年5月31日までで、6月1日から8月15日までは禁漁期間である。本報告では統計上、漁期年を用い、1漁期を8月16日から翌年5月31日までとした。

(1) 全体の漁獲動向

図14に1981年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業（以下、浜田沖底という）における総漁獲量と1ヶ統当たり漁獲量（以下、CPUEという）の経年変化を示す。

総漁獲量は、操業統数の減少により急激に減少したが、1993年以降3,000トン台で安定して推移している。一方、CPUEは日韓新漁業協定が発効された1998年以降急増し、2006年は600トンを超え、1981年と同水準となった。

2006年の浜田沖底の総漁獲量は前漁期を5%下回る3,301トン、CPUEは660トン/統であった。また、総水揚げ金額は15億300万円、1統当たり水揚げ金額は3億600万円で、前漁期を11%上回り、81年以来最高の水揚げ金額を記録した。今漁期は、大型クラゲが来遊したものの沖合域は比較的分布量が少なく、操業も順調に推移したこと、主な漁獲対象であるカレイ類が好調に推移したことが好漁の原因と考えられる。

(2) 主要魚種の漁獲動向

①カレイ類

図15にカレイ類のCPUEの経年変化を示す。

ムシガレイは長期的に減少傾向にあったが1993年を底に、1990年代後半は増加に転じた。2006年の漁獲量は522トン、CPUEは104トン/統で、前年を17%、平年（1996年～2005年平均）を64%上回った。

ソウハチは1990年以降、大きな変動を示しながら減少傾向にある。特に1999年以降は急減し、3ヶ年で1/4まで減少した。2005年からは

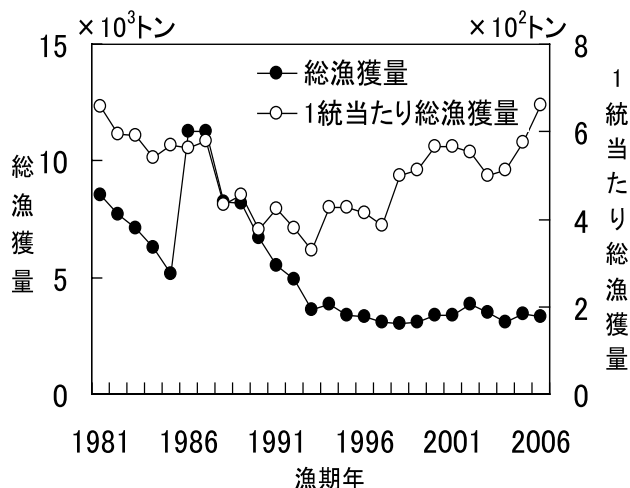


図14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1ヶ統当たり総漁獲量の経年変化

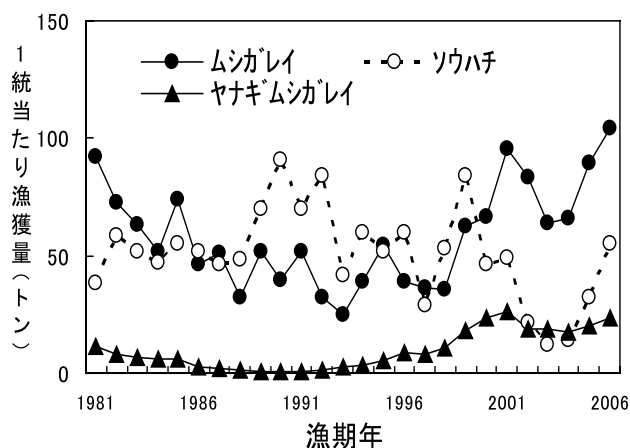


図15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるカレイ類の1ヶ月統当たり漁獲量の経年変化

増加に転じ、2006年の漁獲量は275トン、CPUEは55トン/統で、前年を70%、平年を37%上回った。今漁期は島根沖冷水の張り出しが例年よりも強く、冷水性の本種の漁場が比較的沿岸部に形成されたことが原因と思われる。また、小型魚が多く漁獲され、減少傾向から増加傾向への転換が期待される。

ヤナギムシガレイは1991年以降増加傾向にあったが、2001年以降は停滞気味である。2006年の漁獲量は118トン、CPUEは24トン/統で、前年を19%上回り、平年を38%上回る水揚げがあった。カレイ類は全般的に好調に推移し、漁獲量、水揚げ金額の増加の主要因となった。

②イカ類

図16にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカは数年周期で変動を繰り返し、最近では減少傾向にある。2006年の漁獲量は146トン、CPUEは29トン/統と前年を45%上回ったものの、平年の55%に留まった。

一方、ヤリイカは1990年以降急激に減少し、近年は極めて低水準で推移している。2006年の漁獲量は33トン、CPUEは7トン/統であった。

③その他

図17に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種のCPUEの経年変化を示す。

アナゴは1995年以降、漁獲量の年変動が大きくなり増減を繰り返している。2006年の漁獲量は248トン、CPUEは50トン/統で、前年を45%、平年を42%上回った。

アンコウは1990年代以降増加傾向にある。2006年の漁獲量は336トン、CPUEは67トン/統で、前年を49%、平年を136%上回り、1981年以降最高の水揚げとなった。

キダイは1990年代に入って増加傾向を示していたが、1998年以降年変動が大きくなり、好不漁を繰り返している。2006年の漁獲量は208トン、CPUEは42トン/統で、前年を178%、平年を56%上回った。

ニギスは90年代に入り周期的に大きな変動を示している。2006年の漁獲量は161トン、CPUEは32トン/統で、前年の68%に留まったが、平年を16%上回った。

アカムツは1999年、2000年と急増したものの2001年に急減、その後は緩やかな増加傾向を示している。2006年の漁獲量は120トン、CPUEは24トン/統で、前年を53%上回る漁獲があった。しかしながら、産卵加入前の2歳魚が漁獲の中心であったため、今後の資源動向への影響が危惧される。

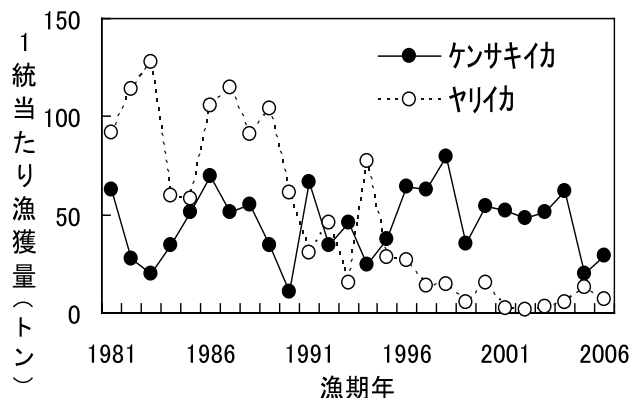


図16 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の1ヶ統当たり漁獲量の経年変化

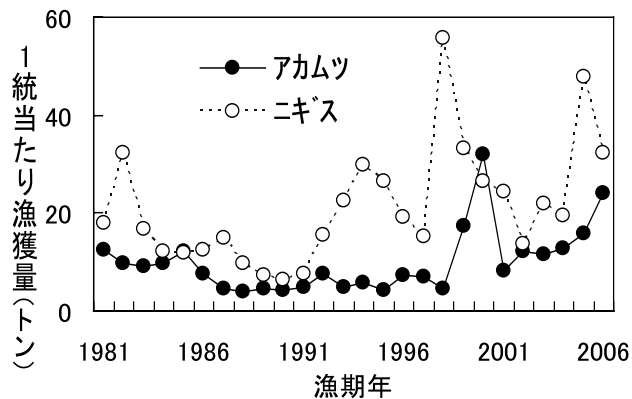
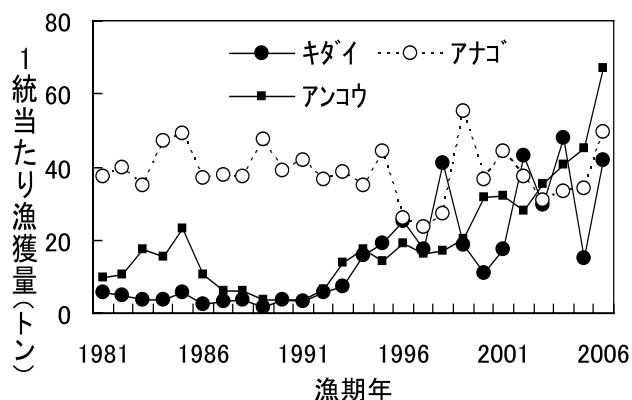


図17 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における主要種の1ヶ統当たり漁獲量の経年変化

4. 小型底びき網漁業第1種

本漁業は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深80～180mの海域を漁場とし、現在57隻が操業を行なっている。操業期間は9月1日から翌年5月31日までである（6月1日から8月31日までは禁漁期間）。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を9月1日から翌年5月31日までとした。なお、本報告ではJFしまね温泉津支所所属船を除く56隻分の集計値を用いた。

(1) 全体の漁獲動向

図18に1993年以降の小型底びき網漁業第1種（以下、小底という）における1隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化を示す。

2006年の小底全体の総漁獲量は5,821トン、総水揚金額は23億9,382万円であった。一方、1隻当たり漁獲量は104トン/隻、水揚金額は4,275万円/隻で、いずれも前年（76トン/隻、3,156万円/隻）、平年（過去10年平均値 85.2トン/隻、3,834万円/隻）を上回った。沖底と同様に、大型クラゲが来遊したものの沖合域は分布が比較的少なく、操業が順調に推移したこと、比較的単価の高い魚種（キダイ、アンコウ、アナゴ類等）の漁獲が好調だったことが主な原因と考えられる。

(2) 主要魚種の漁獲動向

①カレイ類

図19にカレイ類の1隻当たり漁獲量（以下、CPUEという）の経年変化を示す。

ムシガレイのCPUEは5トン/隻前後で比較的安定して推移している。2006年の漁獲量は341トン、CPUEは平年（過去10年平均）を14%上回る6.1トン/隻であった。

ソウハチの漁獲量は1998年をピークにその後急減した。2006年の漁獲量は953トン、CPUEは17トン/隻で平年を5%上回った。

メイタガレイの漁獲量は135トン、CPUEは2.4トン/隻で、平年を66%上回った。

またヤナギムシガレイ（2.4トン/隻）は平年比45%増であった。

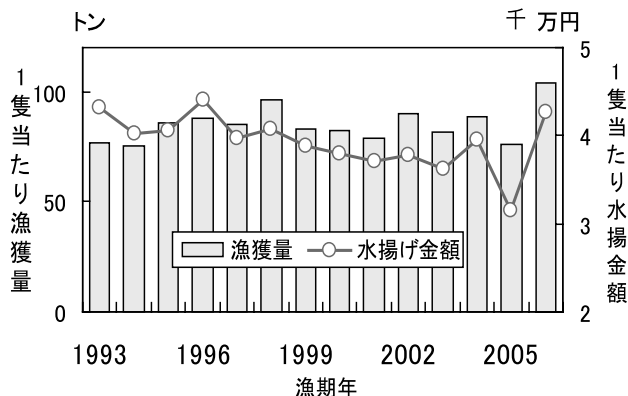


図18 小型底びき網漁業における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化

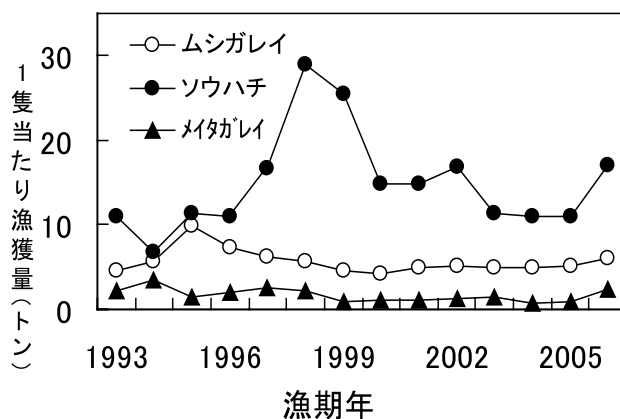


図19 小型底びき網漁業におけるカレイ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

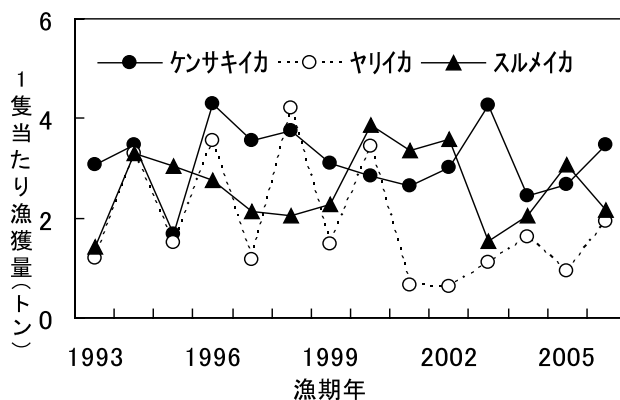


図20 小型底びき網漁業におけるイカ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

②イカ類

図20にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカのCPUEは3トン/隻前後で推移していたが、2003年に急増して4トン/隻を

越えた。2004年には大きく減少したが、2006年はやや回復した。漁獲量は194トン、CPUEは3.5トン/隻で、平年を7%上回った。

一方、ヤリイカのCPUEは2001年までは1年おきに好不漁を繰り返していたが、2002年以降は低水準傾向が続いている。2006年の漁獲量は109トン、CPUEは1.9トン/隻で平年比103%と、ほぼ平年並みの漁獲に留まった。

スルメイカの2006年の漁獲量は121トン、CPUEは2.2トン/隻で、前年の70%、平年の81%の漁獲に留まった。

③その他

図21に小底で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種のCPUEの経年変化を示す。

近年増加傾向にあるアンコウは本漁期は急増し667トンの水揚げがあった。CPUEは12トン/隻で、平年を113%上回った。

ニギスのCPUEは1999年に大きく落ち込んだ後2002年から再び10トン/隻前後まで増加したが、その後は停滞しており2006年の漁獲量は618トン、CPUEは11トン/隻であった。

アナゴ類の2006年の漁獲量は260トン、CPUEは4.6トン/隻で、平年を67%上回った。

アカムツの漁獲量は186トン、CPUEは3.3トン/隻で、豊漁年だった2000年と同水準の水揚げであった。

キダイの漁獲量も沖底と同じく大きな年変動を示す傾向にある。2005年は大きく減少したが、2006年の漁獲量は448トン、CPUEは8.0トン/隻と増加し、前年を97%、平年を49%上回った。

ハタハタの漁獲量も年変動が大きく、2006年は1.8トン、CPUEは33kg/隻で、ほとんど漁獲されなかった。

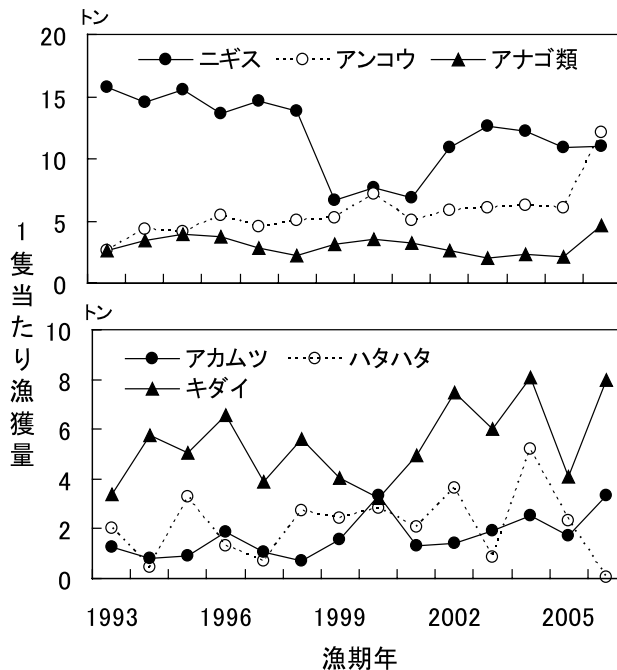


図21 小型底びき網漁業におけるその他主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

5. ばいかご漁業

石見、出雲海域におけるばいかご漁業は小型底びき網漁業（第1種）休漁中の6月～8月にかけて行われており、平成18年の稼働隻数は6隻（石見部5隻、出雲部1隻）であった。解析に用いた資料は、JFしまねからの漁獲データと各漁業者に記入依頼を行なっている操業野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、エッチュウバイの価格動向および漁場利用について検討を行なった。また、資源生態調査として、JFしまね大田支所ならびに仁摩支所に水揚げされる漁獲物の殻高を銘柄別に測定し、この結果と銘柄別漁獲箱数からエッチュウバイの殻高組成を推定した。

(1) 漁獲動向（図22～24）

エッチュウバイの漁獲量は平成12年以降減少していたが、平成18年度は前年に比べ増加した。ただし、単価は平均377円/kg（前年443円）と過去最低で、漁獲金額は3,960万円にとどまった（図22）。1隻あたり漁獲量で見ても平成18年度は漁獲量・金額共に前年を上回っている。（図23）

(2) 資源動向

エッチュウバイのCPUE（1航海あたり漁獲量）は平成12年以降減少し続けており、資源水準は低下し続けていると考えられてきた。ところが平成18年はCPUEが518kgと前年より増加している（図3）。しかし、1航海あたりの漁獲個体数は依然低水準であり、殻高組成を見ると殻高90～100mmの大型個体が突出して多く漁獲されている（図25）。後述の漁場調査の結果や聞き取り結果からも、漁獲量が増加した原因は大型個体が未開拓の漁場で多く漁獲されたのが原因であり、資源状態が好転したわけではないと判断される。

(3) 漁場（図26）

漁場は前年と同じようにN35° 35～45'、E132° 10～30' 付近の漁場に集中している。一部で漁場の拡大（水深200～220m）があり、この漁場で前項に述べた大型個体がまとまって漁獲された。

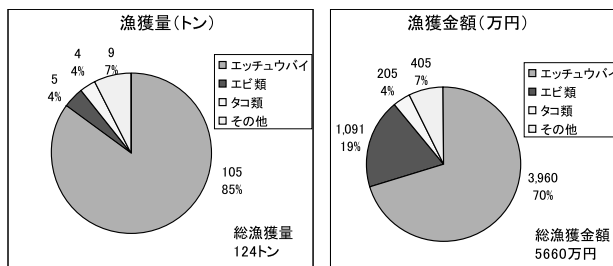


図22 平成18年度ばいかご漁業（石見・出雲）の漁獲量・漁獲金額（*全船）

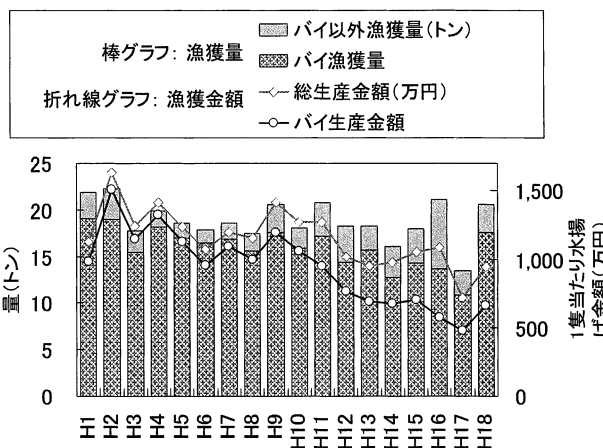


図23 ばいかご漁業における1隻あたり漁獲量の推移

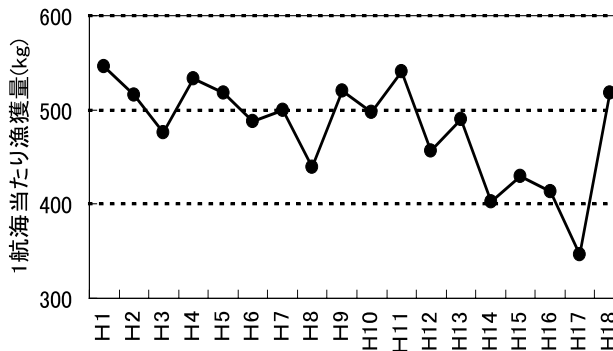


図24 エッチュウバイのCPUE（1航海あたり漁獲量）の推移

(4) 魚価の推移 (図27、28)

平成18年度は単価の低い大型貝が多くを占めたこともあり、エッチュウバイの1kg当たり平均価格は石見部で373円(前年比-61円)、平田支所で401円(前年比-85円)と過去最低となった。このため、平成18年度は漁獲量は増加した

ものの、漁獲金額では過去5ヶ年の平均を下回ることとなった。エッチュウバイの魚価安はバイかご漁業の経営が好転しない大きな要因となっている。

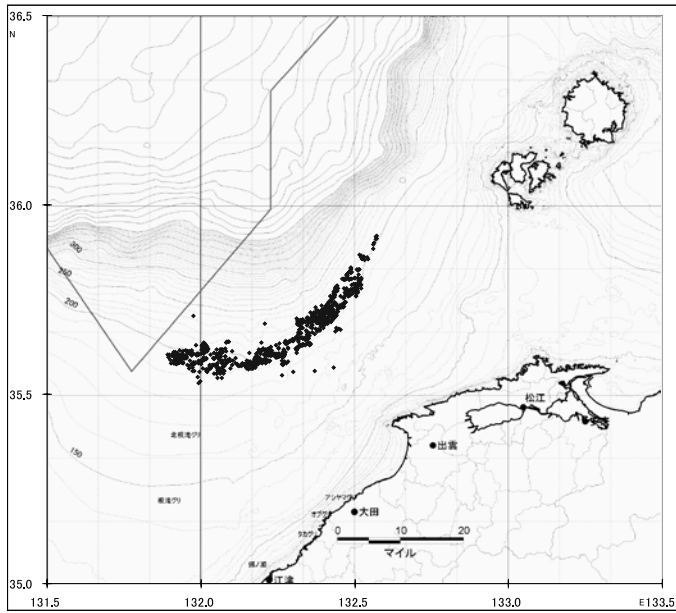


図26 平成18年度ばいかご漁業の漁場

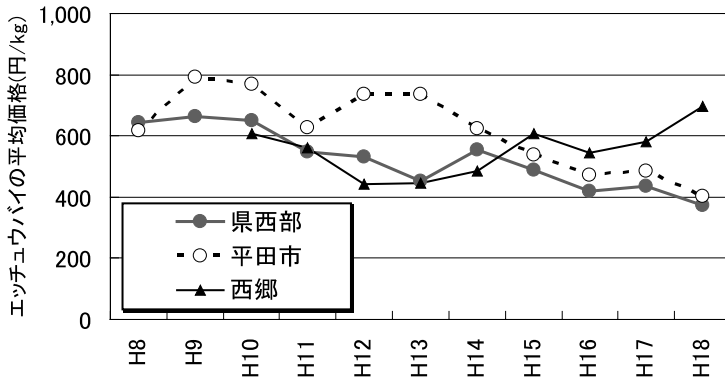


図27 エッチュウバイの平均単位の推移 (6-8月)

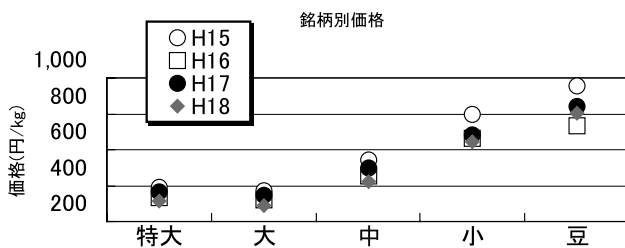


図28 エッチュウバイの銘柄別単位

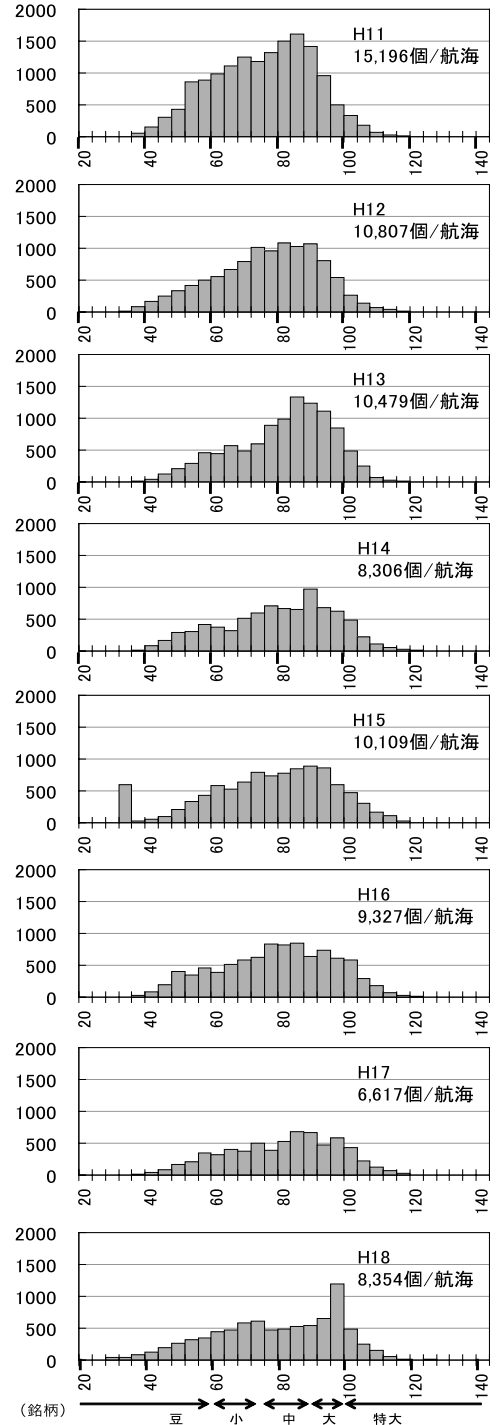


図25 エッチュウバイの殻高組成の推移 (個数は1航海当たり)